

今日の一句

平成二十一年～二十四年

村井昭三



〇〇の手習い。趣味の連句と俳句を始めて
十有余年。

そして、八十になったらパソコンを始めよ
うと思いい立ち、始めたパソコン。
両方を一緒にした楽しみとして
毎週ブログに掲載した俳句です。

(村井昭三)今日の一旬

<http://bit.ly/cXafHO>

こぞことし

去年今年 想定外の 変多く

体調の 安否気遣う 賀状増え

初夢は 青春回歸 覚めてなお

はる

遙かなり 二・二六の 兵に告ぐ

はつうま

初午や 王子稻荷の 凧の市

梅の里 大日本史を 発信し

春寒し 金婚の妻 要介護

つぼやき

壺焼は 弁天様が 後ろ盾

しんおうき

知らぬ間に 投句入選 晋翁忌

観るだけの マンション暮らし 苗木市

合格が 生涯決める 世がつづき

みどり児の 柔肌真似る 鶯餅

うぐいすもち

初午や 屋上稻荷 賑わいて

なかのうみ

中海 浮かぶ苗床 大根島

幕山や 幕一杯に 梅の花

ひび

大森や 筵消え残る 海苔の店

万物の 鼓動を秘めて 春浅し

とうとう

彼岸への 橋のない川 滔滔と

やよいじん

かんおうむさしの

弥生尽 観桜武蔵野 寮歌祭

球根を いとし子のごと 春の土

こわれゆく 妻との日々に 春惜しむ

来し方に 行く末おもう 暮の春

ごしよ

おおさわいけ

嵯峨の御所 大沢池に 花吹雪

宇治の香を 都踊りの 幕あいに

わが寮歌 「若葉の古城」 口ずさむ

茶の緑 模様見事な 遠州路

あしゆら

夏なかば 阿修羅の像に 人溢れ

ぐだぶつあん

五月雨や 愚陀仏庵に 子規の声

げしびやくや

夏至白夜 バルトの街を 夜もすがら

青池や 青に溶け入る 青蛙

父の日に　よせる笑顔の　妻無心

おうせきえぎ

七夕や　逢瀬遮る　核細工

鰻の日　順番待ちの　老舗前

うすもの

ね

羅と　三味の音似合う　神楽坂

りようまぞうか

桂浜　竜馬像下に　土用波

阿波踊り 商店街に 出前連

かがり火に 秋の鶺鴒映し 錦川

ううつ

つるぎだけ

今一度 見たい朝焼け 剣岳

いや

炎天下 癒し求めて 寮歌祭

こうぶんてい

静寂の 好文亭に 虫を聴く

六段の 調べにゆれる 白い萩

しゅうしよたび

妻病んで 愁思四度の 淵深く

戦火から 江戸を救いし 西郷忌

仙石の すすき分け入り 兎等遊ぶ

とりおとし

鳥威 棚田一帯 どよもして

蓮の露 薬師如来の 薬瓶に

かかし あぜ

役目終え 案山子は畦で 慰劳会

野毛山に 異国歸りの 霧笛聞く

花嫁に 重なり浮かぶ 七五三

そうかんき

ふるさとに 一夜庵あり 宗鑑忌

タワールビル 小春の池に ゆらめいて

木枯らしや 世の暗雲を 吹き払え

マフラーに ファッションを巻く ヤング達

好奇心 そそるマスクを 付けた人

大晦日 来年こそを 期待して

大寒や 日本列島 陽気漬け

かいおうた

初場所や 魁皇樹てた 金字塔

よみぞめ

読初は 積んどく本へ 挑戦し

初句会 初心忘れぬ よすがとす

孫受験 娘懸命 サポーター

大宰府と 水府を結ぶ 梅便り

納税期 妻の介護で 税還る

むらさきばかま

卒業の 紫袴 晴れやかに

北帰行 鳥風を待つ 司令塔

木の芽和え 左党の頃を 思い出す

まんぐせつ

万愚節

真偽見分けの
訓練を

ぼくてい

墨堤の

桜眼下に
新タワー

きゆう

花冷えや

期友の通夜の
「海行かば」

かす

うみほたる

潮干瀉

沖合い霞む
海螢

だみん

春雷に

惰眠の夢は
かき消され

鳥交る 佐渡の天空 トキが舞う

あさじ

善光寺 朝事の読経 夏めいて

しんじゆ

遍路笠 新樹の中に 見え隠れ

りつりん

きくげつてい

栗林の 掬月亭に 新茶飲む

新茶添え 坊ちゃん団子 道後の湯

時の日や きびしさつつのる 八十路坂

やそじざか

青時雨 枯山水の 石組みに

年毎に 出番減りゆく 浴衣がけ

あじさい

紫陽花の 変化浮世の 様に似て

ちくぶじま

竹生島 弁天様に 風薫る

空梅雨に 大山の神 御腰上げ

名古屋場所 国技を賭けた 正念場

短夜や 越し方行方 こもごもに

わぎ まご

西瓜切る 業孫たちに やって見せ

にしかま おね

新涼や 西鎌尾根を おもむろに

夕張の 汗の結晶 メロン食む

盆踊り 商店街の 人寄せに

初秋や 余生の余白 それとなく

山形や クレールン車も出て いも煮会

名月や 剣立山 一望に

敬老日 紙上に生きる 高齢者

コスモスを こよなく愛し 妻逝けり

政治家の 襟元飾る 赤い羽根

芋の葉の 露の転がる その先は

露踏んで 頂上目指す 八合目

文化の日 受賞夫妻の 晴れやかさ

元総理 寮歌高唱 体育日

七五三 色は匂へど 散りぬるを

小春日や 「謚」ひつ探究の 画展観る

みだがはら 弥陀ヶ原 がき 餓鬼の田圃に たんぼ 初時雨

この国の 洗濯願う 年の暮れ

漱石忌 愚陀仏庵は 姿消し

ごちゆうあん

其中庵 しじまの中に 木の葉散る

いっさき

一茶忌や 親なき雀 慕い来て

手元より 足元不如意 年の坂

コンビニの 七草セット 重宝し

若水の お薄で気分 一新し

軸足を 余生に移す 年男

ちどりはい

初釜や 懐石膳の 千鳥盃

節分や 豆をまく声 稀となり

しんもえだけ

春動く 新燃岳に 溶岩湖

冴え返る 能楽堂に 鼓笛かな

ふくいく

梅の香の 馥郁として 臨時駅

大内の 雛は妻の 置き土産

春なかば 日露戦から 百余年

どぎも

蜂の子に 度胆抜かれし 木曾の宿

この世への 出を待つ木の芽 勢ぞろい

やよいじん

弥生尽 原発事故の 底知れず

はなみどう

縁と絆 思い新たに 花御堂

はんなりと 都踊りの 幕上がる

春眠や ひそかに寄せる 年の波

春愁や 心残りの ことばかり

この国の 明日を頼む ことどもの日

げだつ

若葉風 解脱の門を 潜り抜け

なえ

くだし

地震の後 卯の花腐し 晴れやらず

清流に 彩添えて 菖蒲立つ

五月尽 みすずの詩に 心癒え

はんげしやう

半夏生 わび茶の席に 趣を

五月雨や 避難所暮らし 果てしなく

ふるさとに 萤火となり 兵帰る

くわがた

縄文の 鋤形今に 甦り

みむろとじ

おおはちす

三室戸寺 天水桶に 大蓮

向日葵の ように生きたる 美女ありき

短夜や 見たい夢まで 遮られ

水遊び 放射線量 ハードルに

原爆忌 核廃絶の一里塚

敗戦を 終戦とした 記念の日

炎天の 一瞬を衝く 涼気かな

朝顔や 日記の主演 懐かしく

きんちやくだ

巾着田

視野をはみ出す

曼珠沙華

まんじゆしやげ

秋涼し 巨匠競演 裸婦の像

だっさいき

書くことを 貫き通し 獺祭忌

栗飯や 銃後の主食 護国芋

一夜漬け 孫に付き合おう 夜食かな

巖島 社浮かべて 秋の潮

天高し ドーム見上げる 乙女像

やや寒し 水中歩行 速度上げ

きくし

人形は 菊師の技に 活気得て

ユニクロの 店頭飾り 冬めいて

そそ

立冬や 十月桜 楚々として

冬浅し 体調管理 日に新た

さんま

支え合う 目黒の秋刀魚 味深し

年毎に 重み加わる 師走かな

小春日や おかげ横丁 人の波

コンビニの おでんの味も 侮れず

松山に 団子残して 漱石忌

行く年に 悲しみ乗せて 送りたし

初詣 日本丸の 幸祈る

初釜や 馳走は宗家 ご用達

はしけやし 成人の日の 双子孫

伊勢海老と 日出度々競う 瀬戸の鯛

可憐さに 凛りん潜ませて 福寿草

赤坂や 老舗に「夜の梅」薫る

カルストの 秋吉台を 野火走る

初午や 路地の祠に 油揚げ

つるし雛 伊豆の海背に ゆらゆらと

つまごじゆく

食膳に 蜂の子シヨック 妻籠宿

れんぎよう

ひらてまえ

連翹を 備前に入れて 平点前

あぶりね

きかく

阿夫利嶺を 大パノラマに 其角の忌

なかなかに 春の送れぬ 辰の年

弥生尽 武蔵野寮歌 幕を引く

忘れ霜 三千院の 階に

なかなかに 春の送れぬ 辰の年

観光の 鯛網の鯛 疲れ見え

大雨を 先駆けとして 夏に入る

節電に 後を押されて 衣更え

島原や 一揆の城址 夏きぎぎす

プリンセス 美智子麗し 薔薇園

鞍馬寺 筍飯を 堪能し

紫陽花を かきわけ電車 高度上げ

父の日や 娘の幼時 よみがえる

八年目 梅雨台風が 大暴れ

十薬や 吾がマンシヨンの 裾飾る

向日葵の 迷路舞台に かくれんぼ

でんぽういん

青時雨 伝法院に 連句巻く

らくだ

鳥取の 熱砂に駱駝 悠然と

つるぎ

吾三度 剣登山を 果たしおり

広島や 一日一日が 原爆忌

長崎や 祈るほかなし 原爆忌

蛸や 地下の我慢を 鳴き尽くす

秋暑し 馬齡重ねて 八十四

鬼やんま 交尾の飛翔 誇らしげ

あおぎた

青北風や ホルンフェルスは 屹然と

きつぜん

こおろぎと 寝る山頭火 羨まし

路地裏は 明治のまんま 獺祭忌

秋高し 千畳敷に 猿遊ぶ

ふるさとは 金毘羅祭り 水夫集う

ものおもう 心にしみる 温め酒

旧友の 旅立ち加速 末の秋

しだ

きのこ

赤松と 羊歯手掛かりに 茸狩り

よと

四度の滝 興を深める 秋時雨

おしのはっかい

ふゆひなた

富士を背に 忍野八海 冬日向

立冬や 身辺整理 弾みつけ

さごんか

おきな

山茶花を 笠にこぼして 翁来る

小春日や 寮歌うたいに 名古屋まで

おうみじま

青海島 鯨の墓に 花絶えず

あんこう

吊るし切り される鮫鰯 目に涙

公園の 落ち葉プールに 児等遊ぶ

月冴ゆる ふるさと慕う 山頭火

http://blog.goo.ne.jp/minna_ai

村井昭三

(村井昭三) 今日の一句 Vol.2

<http://p.booklog.jp/book/64830>

著者：村井昭三

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/msyouzou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64830>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64830>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ